

Mozambique

[モザンビーク]

写真・文＝永武ひかる（写真家）

希望の ともしび

コバルトブルーの海に囲まれたモザンビーク島。
日が和らぐ夕方、海に飛び込んで子どもたちが
遊んでいた



男性たちが網を繕い女性たちが食べ物売らる傍らで、子どもたちがひもを張って遊んでいた



ウニの中身を取り出す人々。引き潮の浜では、ウニや貝、小魚などを捕る人が点在していた



古びた雰囲気の街角は味わいがある



帆かけ船で漁をする人々

地球ギャラリー vol.78

2014年3月、10年ぶりにモザンビークを訪れた。世界の最貧国の一つといわれる一方、豊富な天然資源が注目を浴びるこの国の素顔を探りたかったからだ。

真っ青な空に澄んだコバルトブルーの海。目の前に延びる橋を進むと、モザンビーク島に入った。北東部ナンプラ州にあるこの島は、ユネスコの世界遺産。古くはアラブ人が暮らし、ポルトガル植民地時代は中心都

市となったことから、その名は現在の国名に引き継がれている。

島の北部は歴史的な石造りの建物が並び、路地に入ると朽ちかけた壁がわびさびの情感を誘う。南部には漁民が暮らす家がひしめき、モスクを囲む鮮やかな緑や教会の白い壁が光に反射してまぶしい。浜の木陰では男性たちが漁の網を繕い、女性たちがトウモロコシなどを売っていた。

船着き場では捕れた魚介の人々がにぎわう。男性が大きなロブスターを手にとってにっこり。地べたに座って、山積みになったウニの中身を取り出す人も。日が暮れるころ、要塞に行くと、古い大砲や十字架を冠した砦が赤く染まり、子どもたちが海に飛び込んで声上げていた。



モザンビーク島と本土は長さ約3キロの橋で結ばれている。漁船が戻ると人々が集まってきてにぎわう



橋を渡る時にすれ違ったのは、日本から運ばれてきた中古車。モザンビークをはじめとしたアフリカでは、日本の中古車は長持ちすると人気がある



村の集會に集う女性たちが、世間話に花を咲かせる。笑い声と共に穏やかな明るさが広がった



ナンブラ州の州都ナンブラの近郊では、人と荷物でぎゅうぎゅうのトラック

街を歩く女性に目を奪われて声をかけた。伝統的なペイントをおしゃれに施していた



1990年代の内紛時、多くの遺体が投げ捨てられたというザンベジア州の丘の上には、追悼の十字架が立っている

島から車で3時間ほど行くと州都ナンブラに着く。国内第3の都市で、世界各国からビジネスマンが訪れる。約200キロ離れたナカラ港は現在拡張開発中で、アフリカの主要な貿易拠点になる見込みだ。

街中を颯爽と歩く女性がいた。真っ赤なシャツに、カプラナと呼ばれる民族調の巻きスカート姿。「国際女性デーの集會に行くところよ」。顔の白いペインティングが実に粋だった。

街中を抜けると農村風景が続き、幹線を外れると土の道になる。村では子どもや女性がピーナツを摘み取っていた。国民の約8割が農民。背に子どもをおんぶし、頭に荷を乗せて、両手にモノを持つ。真つすぐと背を伸ばし、地を踏みしめて歩く女性の姿が心に焼き付いた。

今年には独立から40年。内戦終結からは20数年がたつ。中部ザンベジア州では、10年前はまだ地雷撤去や住民からの武器回収が行われていた。地雷で失明して腕を失った自らの経験を部族語で歌うミュージシャンもいた。地元の人に尋ねてみると、彼の歌は暗いから好きじゃない、亡くなったよ、と聞いた。胸がうずいた。

民族も言語も異なるが、穏やかで礼節があるモザンビークの人たち。主張がぶつかり合う世にあって、彼らの姿から国を支える希望のともしびのようなものを感じた。



ナンブラ州の農村。子どもたちもピーナツの収穫を手伝っていた

column

永武ひかるさんが主催する世界の子どもたちと写真を通じて交流する「ワンダーアイズプロジェクト」。モザンビークの子どもたちが撮った写真もホームページ(www.wondereyes.org/)で公開中。



平和への願いが込められた
作品といえば

武器アート



武器アートを作ることができるアーティストは、国内に数えるほどしかないという

モザンビークのアーティストが手がけたオブジェ。見た目は実にユーモラスだが、なんと材料にはかつての内戦で使用された武器が使われている。

1992年に内戦が終結した後、国内に残されたのは大量の武器。

そこで現地のNGOを中心に武装解除を目的に始まったのが、武器を農具や自転車と交換して回収を推進するプロジェクト。回収された武器は、アーティストの手によって平和を訴えるオブジェへと生まれ変わった。「内戦中にできなかったことに挑戦したい」という思いが込められたのは、楽器の演奏や読書を楽しむ人たち。鳥やトカゲといった動物には、「命を失ったのは人間だけではない」というメッセージが込められている。

この武器アートは世界各国から、平和教育の一環として注目が集まっている。本物の武器の生々しさに初めは衝撃を受ける子どもたちも、授業が終わると「もっと海外のことを知りたい」「募金などできることをしていきたい」などと真剣な表情に変わる。モザンビークの人たちの平和への願いは、確実に広がっている。



NPO法人えひめグローバルネットワークのイベントで、県内の小学生に武器アートを紹介

地球ギャラリー

モザンビークの文化を知ろう!

取材協力: NPO法人えひめグローバルネットワーク

美しいビーチが広がるモザンビークでは、さまざまなトロピカルフルーツが味わえる。中でもココナツは特に、地元の人たちにとってなじみ深い果物。どの家庭にも、ココナツをカットするための専用の道具が置いてあるほどだ。もちろんそのままジュースにして飲んでもいいが、たまにはひと手間加えて、地元定番のお菓子「ドセ・デ・ココ」を作ってみてはどうだろう。

作り方はいたってシンプル。砂糖と水を合わせて温めたものに、ドライココナツを入れて混ぜ合わせる。それを熱いうちにお皿に移し、薄く平らになるように形を整えたら、あとは固まるまで待つだけだ。お皿は丸いものでも四角いものでも、作りたい形に合わせて選ぼう。

「ドセ」とはポルトガル語で甘いという意味。その名の通り、口に入れた瞬間甘くて香ばしいココナツの風味が広がる。カリッとした食感は、日本のおこしに近いかもしれない。モザンビークでは知らない人はいないというほど、子どもから大人まで人気のお菓子。ぜひ南国の気分を味わってみよう。

モザンビーク料理といえば ココナツを使ったお菓子

ドセ・デ・ココ



【RECIPE】

●材料(4人前)

砂糖100g/水40ml/
ドライココナツ100g
(細かく刻まれたものでも糸状にカットされたものでも可)

- 1 砂糖と水をテフロン加工の鍋に入れ、しゃもじで混ぜながら中火で煮詰める。沸騰してきたら火を弱め、焦がさないように気を付ける。
- 2 砂糖があめ色になったらココナツを入れ、手早く混ぜ合わせる。
- 3 全体が混ざったら火を止め、熱いうちに直径15cmほどの浅めの皿に移す。
- 4 1.5cmほどの厚みとなるように、スプーンの裏などで平らな形に整える。
- 5 固まらないうちにナイフで一口大に切り分け、冷めて固まったら出来上がり。



一家に一台あるココナツ削り機。先端に付いたのこぎりのようにギザギザしたスプーンに実を突き刺し、くり抜くようにして削る